様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 １５ 日現在

機関番号：１２６１３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ０３３７９

研究課題名（和文）シャルル・フーリエ『産業の新世界』の校訂翻訳

研究課題名（英文）Making a revised edition of Charles Fourier's Nouveau monde industriel

研究代表者
福島　知己（FUKUSHIMA, TOMOMI）

一橋大学・社会科学古典資料センター・助手

研究者番号：３０３７７０６４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、シャルル・フーリエ『産業の新世界』を、その成立過程に遡って理解することを目的としたものである。同書は19 世紀前半のフランスの代表的な初期社会主義者の作品として著名であるが、全体像の分析は数少なく、邦語への全訳も果たされていない。本研究では、フランス国立公文書館に保管されているフーリエの草稿マイクロフィルムを参看するとともに、初版と全集版の相違を検討することによって、『産業の新世界』成立当時のフーリエの問題意識から後年の弟子たちによる改変までを総覧し、書誌学的な検証を行った。研究の締め括りとして、フーリエ研究の深化を目指し、国内外のフーリエ研究者を中心にした研究会を開催した。

研究成果の概要（英文）：The aim of this project was to understand Charles Fourier's New Industrial World in examining background of its formation. Well known as principal work of one of French early nineteenth century socialists, this work has only few content analysis. Full translation is not published. In this project, bibliographic documentation of this work was made through consultation of microfilms of Fourier's manuscripts conserved at French National Archives, as well as examination of differences between its first edition and complet work's edition. Thus the overview was taken from Fourier's original awareness of problem to later alternation made by disciples. The project ended up with a symposium, where eight domestic and foreign researchers gathered to deepen the research of Fourier's thought.

研究分野：社会思想史

キーワード：シャルル・フーリエ　草稿研究　書誌学　国際共同研究

１．研究開始当初の背景

1829 年に出版されたシャルル・フーリエ（Charles Fourier, 1772-1837）の『産業の新世界』は、この独創的な社会理論家の思想を最も簡潔かつ体系的に詳解したものとみなされ、経済思想史や社会思想史の教科書において必ずと言ってよいほど言及されてきた。しかし、同書の内容の理解はこれまで十分ではなかった。それはひとつには、「分散細分化」の語に要約される当時の産業諸制度の批判と、情念引力理論に基づく実験共同体の設立の展望が、篤志家への資金提供の呼びかけや、ロバート・オウエン派への非難、宇宙創成論やアナロジー論の記述とない交ぜになって行われる独特の難解な文体のせいであり、また、過去にはマルクス主義の圧倒的な影響力のもとで読解の可能性が狭められてきたせいでもある。国内の研究状況を見ても、テキストには部分訳しかなく、わずかな例外を除けば、詳細な解説もされてこなかった。

しかし、同書の位置づけは当時のフランス経済思潮の理解や初期社会主義の研究にとって欠かすことのできない重要性を持っており、また情念論という独自の人間理解に基づく彼の思想は、経済学や社会理論の基礎があらためて問い直されている今日、貴重な示唆を与えてくれるものである。

本プロジェクトでは、フーリエ研究の競う資料を提供すべく、草稿調査をもとにして『産業の新世界』のあらたな校訂を行うとともに、同書の全訳を試みた。

２．研究の目的

本プロジェクトの最大の目的は、『産業の新世界』を草稿研究の次元で再読することを通じて、内容理解を深めつつ、全訳を作成することであった。そのことは結局、フーリエ研究全体の深化を目的にするものであった。

『産業の新世界』のテキストとして最も広く流通しているのは、1840 年代に弟子たちが出版した『全集』を底本にしたものだが、ミシェル・ビュトールが 1973 に出版した校訂版の序文で指摘しているように、諸般のテキスト中で弟子たちが問題視した箇所が『全集』版では断りなく削除されている。そのうえ、フランス国立公文書館に保管されているフーリエ手稿のリストを見ると、『産業の新世界』の下書きが何種類も含まれていることがわかる。従って、草稿と比較してあらためて同書の成立事情を探り、成立以後についても初版から『全集』版への変遷を検証するという作業が、文献学的に同書を検討する上で欠かせないということになる。

また、全訳にあたっては、フーリエの著作全体に目配りする必要がある。後述するように、フーリエの思想は生涯の中で変遷を経ているが、著作の全体を通じて用語分析を行ない、フーリエがどのような意味で語を用いているかを考察することによって、訳語の検討に役立つとともに、用語の変化がどのような思想的変遷の結果であるかが明らかになるかである。さらに、繰り返し用いられるいくつかの例の検討をもとにして、フーリエが思考の核に据えているものを浮かび上がらせることができる。これらは思想史上の理解にとって基盤となる極めて重要なさぎょうである。

フーリエの草稿の研究は、一次所在不明になっていた草稿がエディット・トマによって再発見され、フランス国立公文書館に移管されて以降、とりわけ 1950 年代から 1960 年代にかけて盛んに行われ、シモーヌ・ドゥブーによる『愛の新世界』の校訂をはじめとする重要な諸成果をうみだした。しかし、その後は、ルネ・シェレールによるいくつかの草稿の発掘など例外はあるにせよ、以前ほどの熱気は見せていない。とはいえ、フーリエ自身の思想的変遷やテキストに加えられた変容を考えるとき、草稿を検討する意義は依然として甚大である。

研究代表者は、2006 年にフーリエの『愛の新世界』を翻訳刊行した。同書は 1967 年に初めて公刊されたものだが、翻訳の機会に、フランス国立公文書館に保管されている同書草稿のマイクロフィルムと照合したところ、ドゥブーの校訂に遺漏の多いことが判明した。このため可能なかぎり校訂の誤りを手製する作業を行った。2013 年に刊行した同書の増補改訂版では、再調査によってさらなる訂正作業を行い、あわせて、ドゥブー版で省略されているテキストを校訂・訳出する試みも行った。

『愛の新世界』は題名の類似によってフーリエの別の代表作である『産業の新世界』と対をなすものとして紹介されることがあるが、実際にはそうではない。『愛の新世界』執筆後の 1820 年代にフーリエは理論的変貌を遂げ、恋愛や美食を含めた人間活動の総体的発展を梃子にした社会改革というそれまで抱いていた展望から、産業や家政の改革を中心にした（ただし恋愛や美食を忘れたわけではない）社会構想へと変わっていく。従って、両者を同一平面上で論じることはできない。この思想的変遷を意識しつつ研究を進める必要がある。

また、研究代表者は、フーリエ『四運動の理論』初版に異本のあることを発見し、その報告を行ったことがある。このことは、書誌学的観点から異本とみなすべき本がまだ埋もれている可能性を示唆している。実際、かつてデル・ボやゲーリッツによって行われたフーリエに関する文献学的研究は、タイトルだけを並べるいわゆる列挙書誌学の水準にとどまり、異本の可能性を十分に考慮した記述書誌学に至っていない。しかし、異本の存在はその本の成立事情を探るうえで重要であるばかり、本の流通の実態やそこに記されている思想の受容状況を知るための示唆的な情報を提供してくれるものである。従って、

フーリエおよびフーリエ主義の文献の体系的な調査を、記述書誌学の水準で行う必要がある。

３．研究の方法

『産業の新世界』校訂・翻訳のために、草稿が保管されているパリのフランス国立公文書館等に赴き、必要な作業を行った。帰国後も研究を継続できるようマイクロフィルム化されている資料はコピーを入手した。用語の分析に供するため、フーリエ著作集の全ページを複写し、OCR を使って電子テキスト化した。

また、研究代表者の所属機関である一橋大学社会科学古典資料センターの所蔵資料を中心に、フーリエの公刊資料の各種版本を比較検討した。書誌学的な異同の検証のため、国内に所蔵されているフーリエの主要な古版本を実地に確認した。

４．研究成果

（１）本プロジェクトの最大の眼目である文献学的調査を踏まえた『産業の新世界』の校訂と全訳の作業については、以下のような成果を上げることができた。

第１に、フランス国立公文書館(パリ郊外ピエフィット・シュル・セーヌ)、ローヌ県・リヨン都市圏公文書館(リヨン)にて資料調査を行い、フーリエの草稿を確認し、『産業の新世界』分析にとって有益な洞察を得ることができた。国内でも、小樽商科大学附属図書館などいくつかの図書館で資料調査をおこない、公刊資料の抱える問題について改めて検討した。翻訳について、版元はすでに決定しており、来年度の刊行を目指して準備中である。

第２に、フーリエの著作全体において理論的・思想的な変化がどのように生じているかを探る一助として、フーリエ全集や一橋大学社会科学古典資料センター所蔵の初版本等のイメージデータをもとに、OCR で読み取って、電子テキスト化を進めた。これは一種のデータベースとして活用可能であり、今後の研究にとって基礎的な資料となりうるものである。

第３に、資料調査と並行して、アウトプットも提出することができた。多様な切り口からシャルル・フーリエの思想を分析する作業の一環として、哲学・倫理学的な視野から検討を行った。福島知己「シャルル・フーリエにおける旅行記的イメージの利用」（雑誌論文⑥）、福島知己「恋愛の常識と非常識：シャルル・フーリエの場合」（雑誌論文⑤）はその成果である。さらに、分析のための切り口のひとつとして、生存権思想史の検討を開始し、手始めに生存権の日本における先駆的理論家である福田徳三について評論を行った。福島知己「極窮の図書館：福田徳三の大学図書館観」（雑誌論文③）がその成果である。

また、本プロジェクトと同時進行で研究協力者ないし研究分担者として関わった２つの科研費研究会において、「シャルル・フーリエにおける恋愛について」、「フーリエがどのようにしてふーりえになったか」、「シャルル・フーリエは〈見限られた世代〉の一員か」（学会発表②～④）と題して発表を行い、研究の進め方について有益な助言を受けることができた。

さらに、出版には至っていないが、本プロジェクトのテーマに関連する事典項目と研究論文も執筆することができた。

（２）本プロジェクトは、草稿研究や版本の比較など、文献学的・書誌学的な手法を通じて、フーリエの思想の理解を深化させることを目標に置いていた。このため、（１）の作業と並行して、文献調査手法を検討するために、西洋古版本を対象にした書誌学の研究も継続的に行った。福島知己「R. A . Sayce「1530 年-1800 年に印刷された本の植字慣行と印刷地の特定」の検討」(2)～(4)（雑誌論文①～②、④）および F・ジュショー、P・ボナンベルジェ、A・コマンダ 「製本用皮革とパーチメントに用いられる動物の種類の特定」の翻訳（その他①）は、研究期間中におけるその成果である。関連して、研究期間中の３年間を通じて中高生向けに古典研究の啓発授業を企画し、2017 年には実施代表者を務めた（その他②～④）。

（３）さらに、フーリエの思想全体の理解をいっそう深めるための試みとして、研究の締め括りを兼ねて、海外研究者２名を含む９名の報告者を招聘して最終年度に研究集会を開催した。開催日は 2018 年 3 月 27 日･28 日、会場は一橋大学附属図書館会議室（東京都国立市）であった。海外研究者２名は、研究代表者も所属する国際組織であるシャルル・フーリエ研究学会で中心的な活躍を務めており、それぞれフーリエ研究の現状と、ヴァルター・ベンヤミン論のフーリエ論について報告を行った。日本からの報告者のうち、フーリエを専門的に研究している３名（研究代表者を含む）が、それぞれのフーリエ研究について報告を行った。研究代表者は、「『産業の新世界』の構想と成立―その序文の一草稿を素材にして」（学会発表①）と題する報告を行った。また、ベルクソン思想を専門とする哲学者がフーリエ思想の現代的意義を検討する報告や、文学研究者によるレーモン・クノーのフーリエ論に関する報告も行われた。研究集会を企画するにあたって最大の眼目としたのは、専門研究者だけではなく、さまざまな立場の読者からそれぞれのフーリエ観を提示してもらうことによって、フーリエ受容の多様性を明らかにすることであった。この目的で、『愛の新世界』翻訳公刊を通じて知遇を得た現代詩や絵画の実作者にご登壇頂いた。非常に凝縮された２日間になったと自負している。この研究集会については、今後社会思想史学会等でも紹介を予定して

いる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計６件）

① 福島知己、R. A. Sayce「1530 年-1800 年に印刷された本の植字慣行と印刷地の特定」の検討(4)、一橋大学社会科学古典資料センター年報、査読無、38 号、2018、60–83
DOI：10.15057/29241

② 福島知己、R. A. Sayce「1530 年-1800 年に印刷された本の植字慣行と印刷地の特定」の検討(3)、一橋大学社会科学古典資料センター年報、査読無、37 号、2017、37–69
DOI：10.15057/28594

③ 福島知己、極窮の図書館：福田徳三の大学図書館観、一橋大学附属図書館研究開発室年報、査読無、4 号、2016、1–17
DOI：10.15057/27993

④ 福島知己、R. A. Sayce「1530 年-1800 年に印刷された本の植字慣行と印刷地の特定」の検討(2)、一橋大学社会科学古典資料センター年報、査読無、36 号、2016、26–42
DOI：10.15057/27809

⑤ 福島知己、恋愛の常識と非常識：シャルル・フーリエの場合、藤田尚志・宮野真生子編『愛・性・家族の哲学１愛：結婚は愛のあかし？』ナカニシヤ出版（図書所収論文）、査読無、2016、101-132

⑥ 福島知己、シャルル・フーリエにおける旅行記的イメージの利用、平子友長・橋本直人・佐山圭司・鈴木宗徳・景井充編著『危機に対峙する思考』梓出版社（図書所収論文）、査読無、2016、334–351

〔学会発表〕（計４件）

① 福島知己、『産業の新世界』の構想と成立―その序文の一草稿を素材にして、シャルル・フーリエ研究集会「Fourier! Fourier! Deux journées avec Fourier」(国際学会)、2018 年 3 月 27 日、於一橋大学

② 福島知己、シャルル・フーリエは〈見限られた世代〉の一員か、「近代フランスにおける社会構想の複数性と〈革命〉」研究会、2017 年 3 月 19 日、於徳島大学

③ 福島知己、フーリエがどのようにしてフーリエになったか、「近代フランスにおける社会構想の複数性と〈革命〉」研究会、2015 年 9 月 26 日、於上智大学

④ 福島知己、シャルル・フーリエにおける恋愛について、「ポスト 3・11 的危機からみる〈理性〉〈欲求〉〈市民社会〉の再審」研究会、2015 年 9 月 12 日、於立教大学

〔その他〕（計４件）

① （翻訳）F・ジュショー、P・ボナンベルジェ、A・コマンダ著、福島知己訳「製本用皮革とパーチメントに用いられる動物の種類の特定、一橋大学社会科学古典資料センター年報、38 号、2018 年、47-59

② （アウトリーチ活動）平成 29 年度日本学術振興会ひらめき☆ときめきサイエンス～KAKENHI～ようこそ大学の研究室へ「本を残す　本を伝える～古典資料の保存・修復・活用～」（実施代表者・屋敷二郎、実施分担者・福島知己他）、2017 年 7 月 17 日、於一橋大学

③ （アウトリーチ活動）平成 28 年度日本学術振興会ひらめき☆ときめきサイエンス～KAKENHI～ようこそ大学の研究室へ「本を残す　本を伝える～書籍の保存と修復～」（実施代表者・福島知己）、2016 年 9 月 19 日、於一橋大学

④ （アウトリーチ活動）平成 27 年度日本学術振興会ひらめき☆ときめきサイエンス～KAKENHI～ようこそ大学の研究室へ「本を残す　本を伝える～書籍の保存と修復～」（実施代表者・山﨑耕一、実施分担者・福島知己他）、2015 年 7 月 20 日、於一橋大学

６．研究組織

研究代表者

福島　知己（FUKUSHIMA, Tomomi）
一橋大学・社会科学古典資料センター・助手
研究者番号：３０３７７０６４